

くろしお、を悼む

伊野波 盛 仁

5トンほどの小さいくかもめ丸、に代って、新生白色の君の姿を始めて泊港で見た。君は自信に満ち溢れていた。

今は亡き当時の漁業研究室長城田得位さん、庶務課長の平良真義さん、また入院加療中の琉球水産研究所（沖縄県水産試験場の当時の名称）所長友寄隆さん等を始め、漁業関係者を含め多くの人々が君の誕生を喜んだ。

当時の本県水産業界は、遠洋鮪漁業の華やかな時代であった。兄貴分に当る第1世凶南丸（159トン）は、遠洋沖合の鰹鮪漁業の調査指導業務に脚光を浴びていた時である。君は、どちらかと言えば隅っこにおかれた沿岸漁業の調査船としての役割を期待されたのであった。特に当時から今も不安定な経営を強いられている沿岸カツオ漁業のバックアップが主要な役割であったように思う。

カツオ餌料魚の蓄養、資源調査から採捕指導、10年1日の如く君はその仕事をやってきた。しかしくろしお、よ、君の調査船としての生涯の期間は、本県沿岸漁業が従来の三枚刺網漁業から延縄漁業、底立て延縄漁業、深海底刺網漁業へ、また建て干し網漁業から小型定置網漁業へ、更に船のトン数では1トン未満から3トン未満へと質的に変革する期間に相当していた。

君は、沿近海・深海漁場の調査（マチ・ハコエビ・アイザメ）の他、トビイカ資源及び漁場調査、人工魚礁調査、浅海漁海況調査、カツオ餌料調査等、あまりにも多くの各分野の仕事を分担せざるを得なかった。なかでも、中城湾漁場を中心とするタマン（ハマフエフキ）の資源生態調査の成果は特筆すべきであろう。その成果を基本にしてタマンの漁場整備事業が、本県各地域で進められており、近く始められる予定のタマンの種苗放流事業との結びつけによって、その成果はきっと沿岸漁業者の経営安定につながることであろう。それにしてもくろしお、よ、君の命は短い。沿岸漁業の改善と発展の道はなお険わしい状況にあるというのに。

今、漁業調査船としての君の役目は終わった。船体はきしみ、装備の劣悪な条件下で、200海里時代沿岸漁業の見直しが一層厳しく要請されるなかで、君は1度のトラブルもなく、その仕事をこなしてきた。君とともに働いた人々の顔と顔を思いだしつつ以上送別の言葉としたい。